

月山肘折温泉ルート 山行報告



山行日：平成 30 年 4 月 22 日（日）

天候：晴

登山方法：山スキー

メンバー：CL 会員外 K 会員外 3 名（S・W・M） 薄井（記録）

行動時間：志津温泉ゲート前 5:30-月山スキー場リフト下駅の上 7:15-リフト上駅 8:00-
月山山頂 9:50-清川橋 11:05-念仏ヶ原避難小屋 12:20-小岳山頂 13:20-大森
山山頂 15:45 - 肘折温泉 17:30

「肘折温泉ルートは月山のルートの中でも最長で、山頂からゴールまででも 20 kmを超えるそうだ」と昨年報告に書いた。

それは正しいのだが、今回はこれに「月山スキー場のリフトが修理中」というおまけがついた。リフトが使えないならスキー場手前の志津にあるゲートの朝の開門を待つ意味もない（開門時間とリフト運行開始時間は合わせてある）。ならばいっそのこと志津から歩くぞというやぶれかぶれな計画が立てられた。リフト上駅からスタートする一般最長ルートに高低差 770m、距離 5.1 キロのオプションが付いた真の（？）最長ルートのコースタイムは、12 時間の想定である。ハイリスクなプランだが、成功すればこれに見合うリターンは得られるだろう。といってもそれは「自己満足」という誰にも羨ましがられないものではないが…

前泊した道の駅にしかわから移動し、5 時半前に志津のゲート前に到着。昨年はここで7 時の開門を待ったが、今日は準備を済ませたらロープをまたいで歩き出す。数百メートル先にある野営場から雪に上がってスキーを履くと、いよいよツアーの始まりである。



昨年のルートにこのオプションが追加されることで、緊張感がひどく高まっていた。今回のメンバーは、当初の 5 人に石巻の T さんが加わって 6 人。このパーティでの自分の立ち位置を図りかねるが、経験者だし一応一番若いし大丈夫だと言い聞かせる。メンバーの中で最強の M さんのスピードに引っ張られないようにとのリーダーの指示で、ペースを抑えるよう心がけて歩いた。早

朝なのに生ぬるい風が、今日の暑さを予告しているようだ。

ネイチャーセンターを過ぎると湯殿山が大きく見えてきた。南面には痛々しいほどにクラックが入っている。軽く休憩した後、シールが滑りやすく緊張する斜面をジグを切りながら登っていくと、やがてリフトを見下ろす稜線に達した。振り返ると一番奥の朝日連峰を主役に、手前まで雪の稜線が幾重にも続いている。リフト下駅を挟んで反対側の斜面には単独の男性が取りついているのが見え、南側に見下ろす駐車場には、ちょうど車が入り始めたところだった。

リフトを右手に見ながら姥沢沿いに高度を上げていく。風はだんだん強くなってくるが、夏日の今日はむしろ心地よい。リフト上駅に到着して月山を見上げると、西側斜面の上部はかなり黒々としていた。ここで前日ハーフマラソンを走ったという T さんが辞退を申し出て、パーティは 5 人になった。

今日は夏道で行くしかないねと、牛首方面へ向かう。砂丘のようなうねうねとした斜面は、近いようで遠い。じわじわと積雪部上部まで上りつめ、末端の硬い部分を超えて土の地面へ移った。スキーを担いで階段状になっている夏道をしばらく登り稜線に出ると、風



に煽られながら山頂に向かってよろよろと歩いた。

頂上小屋周辺でようやく地面に雪が戻ったが、スキーを担いだまま律儀にその先の鳥居をくぐって初登頂。全方位丸見えの素晴らしい景色が迎えてくれた。山頂神社に大枚 100 円払って今日の無事をお願いし、少し離れてしまったメンバーの到着を待った。

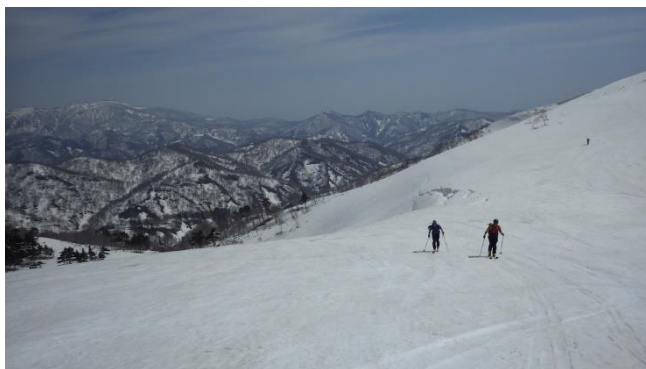
全員そろって準備を終えたら、果てしなく遠い肘折へ向けた滑走が始まる。広大な斜面を目印となる千本桜方向を目指して好き勝手に滑る。障害物は全くなく斜度もきつくないので安心して滑れるが、ときどき雪質が変わってスキーが走らなくなることもある。ともあれ千本桜までたどり着いたら、立谷沢川へ向かって急斜面にえいやと飛び込む。去年よりはスピード



感をもって滑れたか？それにしてもこれほどの標高差を落としてしまうのは、この先に続くアップダウンを思い起こすともったいないとしか言いようがない。

一般ルートの稜線上にはもう雪はなく、あちこちに口を開けている沢に用心しながら先へ進むと、今年の清川橋は雪に埋もれ姿が見えなかった。対岸に渡った休憩ポイントで大休止。今日はもう寒くはならないだろうと、夏山と変わらないスタイルになって念仏ヶ原を目指して登り返した。

念仏ヶ原避難小屋は、去年と同じように屋根だけが頭を出していた。小屋前にはテーブルを作った跡があり、昨夜の賑わいを思わせる。ここまでもここからも、今回はこのルート上ですいぶんほかのパーティと遭遇したのだ。



小屋裏から稜線伝いに小岳を目指して歩く頃から、前回よりも疲れを感じ始めた。もちろん最初のプラス 2 時間半がじわじわ効いてきたのと、暑さのせいもあるだろう。つい雪を掘って口に含んでしまう。遠くなった月山を西に、近くなった葉山を東に見ながら稜線をだらだ

らと登っていく。

小岳から広がる台地の端からは狭い沢筋に滑り込み、ハーフパイプのようなコースを飛ばして距離を稼ぐ。途中でまだ白いうさぎが飛び跳ねていくのを目の端でとらえた。

再びシールを貼って尾根を越え、猫又沢の源頭を目指す。もはやトップからの滑りは困

難な状況の猫又沢にリーダーが途中からトレースを見つけて入り込み、縫うようにして滑る。長いトラバースをへて、ようやく最後の登り返しとなる大森山の取りつきに達した。

スキーを担ぎ、まずは土の露出している夏道へ、そこから雪のついた急斜面にステップを切っていくが、雪は少なく場所によっては踏み抜いてしまうこともある面倒な登りだった。そうしてたどり着いた山頂には、ぎょっとするほど大勢の人がいた。



再度メンバーを集めて、いよいよ近くなった肘折温泉を目指す。林道まではそこそこ木の混んだ急斜面で、相変わらず大してうまくない足前ではターンを即座にあきらめ、横滑りでだましまし下る。林道をしばらく歩いたら、最後はショートカットして朝日台へ滑り込み、夕日を浴びながらのゴールインとなった。

さて、無事踏破したはずなのに、今回はゴールから先にもオプションがあった。いったん除雪された道路へ降りて再び向かいの雪の台地に這い上がる。これを2回繰り返して、ようやく車をデポした肘折小中学校跡へ到着。ここに距離26キロ、累積標高2,000mの肘折ルート完全版がフィナーレを迎えた。感動のラストシーンの片隅で、Sさんは余裕でフキノトウを採取していた。

肘折温泉「いでゆ館」での入浴、東根の極太ラーメンを慌ただしくすませ、最終のつばさに乗り込んだ。